

正倉院事務所における近年の調査

杉 本 一 樹

はしがき

平成一七年に、奈良国立博物館において正倉院をテーマとした学術シンポジウムが企画され、正倉院事務所からは西川明彦氏と私の二名が参加することとなった。西川氏が、模造事業とそれに付随する調査について、具体的な成果の紹介をすることに決まったため、私は、標記のテーマで現在の状況の理解を助けるための概況説明を行なうことにした。本稿は、当日の発表をふまえてはいるが、必ずしもそれにとらわれずに述べている点あらかじめお断りしておきたい。

一

正倉院の宝物の調査の淵源は、前近代にその萌芽を認めることができるが、現在につながる大きな画期となったのは、明治時代に正倉院が政府の直接管理に入ったことであろう。その先蹤を開いたのは、町田久成・蜷川式胤らによるいわゆる壬申調査であるが、注目すべきは、明治四年（一八七二）の古器旧物保存方の布告と、塙国博

覧会への出陳への展望という二つの要因を背景としている点である。ときに政府の基本方針とも密接に関連するが、正倉院宝物の保存と活用という二つのテーマは、以後も正倉院宝物をめぐる各種の局面で、しばしば相反するものとして現れる。いうまでもなく、時々、の宝物管理の担当者にとっては切実な問題であり、彼らの意識から離れることはなかったと思われる。明治初年の、殖産興業を指向する動きとしては、宝物染織品の截断頒布や奈良博覧会への出展があげられるだろう。

明治も一〇年代にはいると、少しずつ宝物保存の指向が明確となり、調査も保存という目的のために奉仕するものとなる。まず、管理の必要上、宝物の所属を北倉・中倉・南倉の三倉に配当し、その名称を定めて目録を作成する必要が生じた。献物帳についての文献学的考証が行なわれたのもその流れの中のことである（例…黒川真頼）。また、宝物の修理にあたっては、事前に十分な現物の観察調査が必要であり、技法や工具に及ぶ周到な調査が行なわれた（例…木内半古）。現在の宝物の観察においても、明治修理の箇所は、単に「製作当初のものではない」という消極的な意味にとどまらず、明治の工人の優れた眼力が破損未修の状態の宝物をどう観察したかの解答を示すものとして重視されるのである。

これらの明治の調査内容は、宝物名称や修理箇所のなかに埋め込まれ、外に現れることは少ないが(明治二五年から三七年の間、宮内省に置かれた御物整理掛の修理仕様などは不明な部分が多い)、最終的に明治四一年の、宮内省宝器主管から奈良帝室博物館への引継目録で確定した。現在も正倉院で用いられる『正倉院御物目録』である。

二

明治四〇年代以降、大正時代には、奈良帝室博物館の下に置かれた正倉院宝庫掛として、古裂ほか辛櫃納在品の整理と経巻の修理を大きな業務の柱とした。調査は必ずしも前面には出ず、森嶋外総長の在任中の楽器調査や大矢透の古訓点調査、そして明治三三年から開始された東京大学史料編纂所による古文書調査など、いくつかの例も、外部の専門家によるものに限られている。

この間、正倉院内部では、古裂整理の進捗に伴って、屏風装・軸装・函装・帖装・玻璃装など、古裂を整理する各種装置が工夫され、それを管理するために「整理済古裂明細帳」と称する帳簿が作成され、記載が蓄積されていった。専門家による調査研究とは性格を異にするが、多様な宝物に適切な名称を与え、ものの特性に応じた修理方法を工夫して、体系立った管理を行なうためには、ものと記録方法の両面にわたる、現場に根ざした知識が不可欠である。この正倉院の中に醸成された経験知といふべきものは、人から人へと受け継がれ、その余風は今にいたっても職員のなかに残っているように思われる。宝物の一部では、この明細帳が現在でも調査書の代わりとなっている。

三

大正一三年から、正倉院宝物調査書の作成が始まっている。昭和二年の秋季曝涼時からは、石田茂作(帝室博物館鑑査官、のち奈良国立博物館長)が調査を担当し、正倉院では松嶋順正(元保存課長)が石田を補佐した。この両氏による調査書作成は、戦後の昭和二六年まで継続した。この調査の基本姿勢は、いうまでもなく管理上の必要性という点にあり、これは悉皆調査から、その先に宝物台帳の作成を展望するものであった。が、それにとどまらず、調査項目は、宝物の所属・名称・数量・品質・形状(必要に応じて図示)・寸法・重量・由緒・銘文・特徴など、と詳細であり、調査を担当された石田・松嶋両氏の該博な知識が惜しみなく注がれている。内部職員の眼で、体系的な調査が遂行された点で、この仕事の意義は大きい。また、上記調査と同時に撮影された写真(撮影担当は東京帝室博物館)をもとに、昭和に入ってから『正倉院御物図録』全一八冊が刊行された(昭和三三〇)。正倉院宝物の全般にわたる、学術性の高い豪華図録で、最後の三冊は、戦後の刊行であるが、基本的に大正末〜昭和戦前期の蓄積の成果と言ってよい。

このように、正倉院の内部に調査の成果が蓄積されていったことが、次の時期すなわち戦後の正倉院における前提となった。上記で紹介した調査書について言えば、宝物の荷造り疎開の期間、作成不能の時期はあったものの、正倉院を取り巻く諸情勢の変動とはべつに、戦前戦後に質的断絶がとくにあるわけではなく、事業としては、現在に至るまで連続と絶えることはない。もちろん調査書はいまだ

に現役で、毎日新聞社刊の『正倉院宝物』のデータは、調査書データを基準に補訂を加えたものであり、正倉院展の準備段階では、奈良博の学芸員の閲覧にも供される。

四

戦後の特徴のなかで、もつとも目立つのが、調査が、専門家による科学的調査として、前面に躍り出たことであろう。その前提となる部分に光があたるように言い換えれば、正倉院が、管理者として自主的に調査を企画立案することが、ここから始まったのである。

昭和二三年に実施された薬物と楽器の調査が、その幕開けであるが、調査が進む中で、基本的方針が次第に形をなしていったようである。その骨子としては、この特別調査は、第一級の専門学者、実技家に、自然科学者を加えたメンバーによる、権威ある科学的総合調査とする。調査の成果は、報告書として提出を求め、刊行公開する、というものであった。時期は秋の曝涼期間（新宝庫建設後は秋季定例開封と呼称を改めた）中の数日、一テーマの期間は二、三年とした。いっぽう、勅封倉外の対象品が多い古裂の調査は、期間をやや長くとした継続的調査としている。調査の記録を整理してみると、昭和四九年までは、一開封に複数の特別調査が実施されており、最近二〇年余の調査しか知らない筆者には、想像の及ばないものがある。

調査成果は、昭和三〇年代の終わりまでは、おもに『書陵部紀要』誌上で単行論文の形で公開された。同紀要には、正倉院事務所の経常業務を紹介する「正倉院年報」も毎号付載され、第七号は

正倉院特集となっている。

これと並行して、三〇年代には、全宝物中から優品を選択し、色彩保存の目的で印刷方式に原色版を採用した大型図録『正倉院宝物』北倉・中倉・南倉三冊、『正倉院宝物 染織』上・下二冊が刊行された。造本・装丁の面でも定評のある豪華版図書であるが、解説もこの時期までの水準を示すものとして、以後スタンダードの地位を占めたものである。

この流れをうけ、これに続く時期には、テーマごとの特別調査報告書も、昭和三九年度の『正倉院の絵画』から、五二年度の『正倉院の木工』までは、大型の美術出版の体裁で刊行された。その後は、『書陵部紀要』から独立した『正倉院年報』（昭和五三年度創刊。一九号から誌名を『正倉院紀要』に変更）が、主たる成果発表の場となっている。

一方、戦前からの流れをくむ、内部職員による経常的調査についてはどうか。器物類については、昭和四〇年ころまでに、ひとつたり調査が完了した。引き続き二巡目の調査や、各種の補足的調査、たとえば宝物残材類の調査などへ移行し、修理・模造などに際して新たな知見が得られるたびに、旧来の調査書に、新たなデータが追加・更新される。染織品については、昭和二八年・三七年の東西両宝庫の建設、同二九年の保存課棟新築（修理室開設）の条件整備のうち、幡・天蓋・衣服類など大規模な展開整理事業が開始され、従来からの古裂整理とあわせて経常業務の柱となった。この事業の進捗に伴い、染織品関係の調査書も充実していった。

また、昭和四八年度からは、保存科学担当として、はじめて自然科学分野の定員がおかれることになった。東西両宝庫の建設の前後

から、大気汚染の急速な進行による保存環境悪化が問題化し、また宝物が一二〇〇年以上にわたって保管されてきた正倉を離れて、鉄筋コンクリート造りの宝庫に移納されるという未曾有の変化にも対応しようとしたものである。

五

最後に、近年の調査の特徴についてまとめてみよう。ここで近年というのは、筆者が正倉院に勤務して（一九八三年）、実体験として知っている時期、約二〇年を指している。

まず、調査の契機であるが、経常の調査としては、宝物の修理・整理や模造などの事業、あるいは管理上の必要に応じて実施されるものが大半を占める。純然たる調査のための調査という事例は多くない。その成果は、修理・模造の質を向上させるために利用される。宝物から学んだことは、宝物自身に返して役立てるのである。その具体的な受け皿となるのが、これまで蓄積された宝物調査書である。

調査の手法は、この段階に至って大きく変化した。従来は一部の対象・分野に限られていた自然科学的な調査手法が、X線分析機器導入を皮切りに、顔料や金工品など無機材料の分析調査へと宝物全般に拡大され、経常調査における重要項目として定着した。他方、観察や実測による従来からの調査も、各種光学機器などの導入により、より精度の高い調査をめざすようにしている。

また、調査への各研究員の関わり方も、少しずつ変化している。もともと、正倉院の専門家を養成する教育機関が外部にあるわけではないから、入所してから、時間をかけて専門家に「育つ」のであ

る。正倉院事務所は、規模が小さいこともあって、大学教育での専門の範囲では間に合わないことの方が多く、そこに閉じこもっている仕事は立ち行かない。現在では、各研究員の専門分野を尊重しつつ、専門外の分野にも積極的にかかわってもらうよう、異分野協業が進行中である。宝物点検を機に、同じ品について定期的観察を積み重ねることは、異状の早期発見など、保存管理上有効に働くことはいままでもないが、宝物に接する時間が、外部の方に比べて圧倒的に長い点は、調査の局面においても、ゆっくり時間をかけて、いわば対話的に進めることができることを意味し、有利な点である。

特別調査は、開始後かなりの年月を経たことから、大きなテーマは一通り出尽くし、二巡目の調査や、従来とは違った切り口のテーマ設定が比重を増しつつある。正倉院側の企画力が問われるわけである。また、お招きした調査員のオーソリテティに敬意を払うことはいうまでもないが、内部職員の知識・経験もまた重要なものとして調査の場に提供され、調査員の見識とうまく組み合わせられるよう配慮することも大切となっている。

調査の成果については、紀要をはじめとする各種出版物を通じて、積極的な公表を心がけている。正倉院ホームページを開設し、近年の正倉院紀要については、インターネットを通じて閲覧が可能となっている。本来、正倉院は、保存を旨として設置された機関だから、宝物そのものに対して、足したり引いたりの手を加えることには極めて禁欲的である。ただ、もしわれわれが、調査を通じて、宝物が個々に内包する情報や価値に新たな光を当てることができたとすれば、それは宝物に新たな価値―益あって害のないもの―を加えたことになると言ってもよいのではなからうか。従って、この種の情報

は、速やかに共有化されることが望ましいと考える。

最後になるが、上記のプラス面は、視点を変えれば、正倉院の調査の弱さでもある。国内外との研究交流や、対外的に正倉院の実情を知ってもらおうという点では、正倉院の体制は十分ではない。また、宝物と長く接することによって、個々の品をこえて共通する奈良時代の感覚・気分については、いつの間にか職員の内にしみこんでくることが、何しろそこに至るまでかなり時間がかかるし、なお通時代的把握、広い視点にたつての比較など、相対的に弱い部分が残るのも致し方ない。これを補うため必要なのは、奈良国立博物館を初めとする、諸機関との連携・交流であろう。正倉院事務所に対する一層のお力添えをお願いしたい。

(すぎもと かずき 宮内庁正倉院事務所保存課長)

【戦後の特別調査】

薬物（昭和23年・1948）が特別調査の開始。以後昭和56年までは、楽器、建築、金工第1次、密陀絵、漆工第1次、材質第1次、古裂第1次、絵画、書蹟、ガラス、紙第1次、陶器、羅、大刀外装、古裂第2次、伎楽面、刀身、組紐、漆工第2次、金工第2次、木工、木材、竹、といったテーマで順次行なわれた。近年のテーマと実施時期は次の通り。

<u>植物</u> (雑)	昭和57 (1982) ~ 昭和58 (1983)	
<u>石材</u>	昭和59 (1984) ~ 昭和60 (1985)	
<u>瑤瑠</u>	昭和61 (1986) ~ 昭和62 (1987)	↑ 朝日新聞社 増補改訂『正倉院宝物』3冊
<u>真珠</u>	昭和63 (1988) ~ 平成1 (1989)	
<u>繊維</u>	平成2 (1990) ~ 平成3 (1991)	
<u>螺鈿</u>	平成4 (1992) ~ 平成5 (1993)	
<u>薬物</u> 第2次	平成6 (1994) ~ 平成7 (1995)	↑ 毎日新聞社 『正倉院宝物』10冊
<u>鳥</u>	平成8 (1996) ~ 平成9 (1997)	
<u>年輪年代</u>	平成10 (1998) ~ 平成11 (1999)	
<u>刺繍</u>	平成12 (2000) ~ 平成13 (2001)	↓ 朝日新聞社 増補改訂『正倉院宝物 染織』2冊
<u>皮革</u>	平成14 (2002) ~ 平成16 (2004)	
<u>紙</u> 第2次	平成17 (2005) ~	

下線は単行本として報告書を刊行、下波線は紀要（初め『書陵部紀要』，木材材質調査以後は『正倉院年報』〔S54. 3～，現『正倉院紀要』〕に掲載）